

## 五感の重奏『共感覚』 『だれもが保有』ふだんは潜在化

言葉に色のイメージを感じたり、味やにおいと視覚・聴覚が結びついたりする「共感覚」。研究のパイオニアである米国のリチャード・サイトウイック博士が、初来日講演した。日本ではほとんど研究されていない分野だが、単に奇妙な現象というだけでなく、脳の構造についても重要なヒントを与えているという。（吉田 薫）

五感がさまざまな形で入り交じる共感覚を持つ人は限られており、サイトウイックさんは二千人に一人くらいだとしている。家族も共感覚という人たちがいることから、特定の遺伝子の変異が原因とみられる。

サイトウイックさんが初めて知った共感覚者マイケル・ワトソンさんは「味には形があって、このチキンはとがった形に味付けするつもりだったのに、丸くなってしまった」と言い「この感覚は誰にも分かってもらえない」と嘆いた。

別の共感覚者では、ポケットベルの音を聞くと、赤くピカピカに光ったしみが頭に浮かび、チワワがほえると、白い閃光(せんこう)のようなものが浮かぶという。

六百人余りの共感覚者を調べたところ、最も多いのは、文字や数字に色のイメージがついているタイプ。次いで、時間の単位から色を想起するタイプや、音楽や音に色がついているタイプが多かった。

芸術家には共感覚者が多く、詩人のランボーや作家のナボコフ、画家のカンジンスキーらが、作品などから共感覚を持っていたとみられる。

どうしてこんなことが起こるのか。

サイトウイックさんは“新生児仮説”で説明する。「シナプスの結合は、発生のとき過剰に形成され、その後“刈り込み”が行われるのだが、遺伝子の変異でシナプスがそのまま残ったため、共感覚がもたらされる」というのだ。

機能的MRIなどで実験すると、共感覚者は、活性化部位が一般の人と異なることが多い。現在の脳機能の考え方は「モジュール説」が有力で、脳の特定部分は特定の機能に専念しており、それぞれ独立しているというもの。「こうした考え方に再検討を迫っている」とサイトウイックさん。「神経回路網に、異種の感覚をつなぐ橋のようなものがあり、それが共感覚者では働いているのに対し、一般人ではふだん潜在していると考えの方がうまく説明できる」とする。

共感覚は誰でも潜在的に持っており、五感はこれまで考えられてきたよりも互いにつながっているのだ、というのがサイトウイックさんの主張だ。

講演は、フレグランス・ジャーナル社(東京都千代田区)が主催するシンポジウム「アロマ・サイエンス・フォーラム」で行われた。

リチャード・E・サイトウイック 神経科医。米ジョージ・ワシントン大などを経て、キャピトル神経科診療所を設立。1970年代後半に共感覚の研究を始める。現在は診療の第一線から退き、共感覚をはじめ認知と感情に関する脳研究に専念。ワシントン在住。

[http://www.chunichi.co.jp/00/sci/20040914/ftu\\_\\_\\_\\_\\_sci\\_\\_\\_\\_\\_000.shtml](http://www.chunichi.co.jp/00/sci/20040914/ftu_____sci_____000.shtml)

記者のつぶやき 静かに...感じてみよう

共感覚研究のサイトウイックさんは、静けさを尊ぶ日本文化に関心を強めている。芭蕉の句「鐘消えて花の香は撞(つ)くタバカナ」も、音と香りの共感覚とのこと。

「東京は騒がしいですが - 」と聞くと、「確かにそうだが、アメリカでは静寂は否定的にとらえられ、刺激によって埋めなくてはならないように考えてしまう。香でも茶でも、静けさを強めるようなところがあって、それがいい」と話していた。

共感覚の入り口は静かなめい想にあるのだという。雑音やスピードにあふれた世の中で、われわれにはいつのまにか感じられなくなり失ってしまったものも多いと思う。（Y）